

（エッセイ）

メイチかアケチか —清張の乱歩批判—

藤井淑禎

松本清張の「推理小説時代」（『婦人公論』昭和33・5。全集では「推理小説の読者」と改題）中の「何という神の如き明智であろう」を、名探偵明智小五郎のことと思いついでいる読者は少なくないのではないだろうか。あまり前後を省略し過ぎても何のことかわからないので補うと、「名探偵の出し方も、あまりに現実離れがしている。『何という神

の如き明智であろう』式の表現で、本職の警官や衆愚を尻目に、ひとりで超人的な活躍をする。読者は、この探偵に作者のロボットを感じるが、人間を感じることができない」となっている。

従来の推理小説は本格派を難じる文脈の中で、この一節は登場するのだが、超人的な活躍をする探偵、とあるので、どうしても明智小五郎をダブらせてたくなるのだ。というより、そう誘導するようにならなければならない、と言つてもいいかもしれない。

かりにこれが明智小五郎のことを指すのでないとしたら、何を指すのだろうか。言うまでもなく、メイチは「すぐれた知恵」（『広辞苑』）以外にはありえない。これでも意味は通る。もちろん、明智小五郎でも十分通る。文脈上はメイチのほうがわずかに優勢のようにも見えるが、結局はどちらもありうるのだし、優劣は決着がつかさうもない。

実はここまでの引用は初出ではなく『松本清張全集34』（昭和49）に拠ったのだが、初出の『婦人公論』を確かめると、この優劣問題は氷解する。何と初出には「神の如き名智」とあったのである。もちろん発音はメイチであり、意味もおそらくは明智の「すぐれた知恵」のつもりだろう。というのも、「名智」という言葉はふつう存在せず、だとしたらこれが明智はメイチの誤植であろうことは

容易に想像がつく。想像をたくましくすれば、誤植のパターンとしては、字体の類似ゆえ、ではなく、メイチメイチと唱えて「明」と間違えて「名」を拾ってしまったパターンだろう（清張が原稿にアケチのつもりで明智と書いたのを誤植したとか、明智はメイチのつもりで名智と誤記したのをそのまま植字したかの可能性等も、もちろんわずかだがある）。ともかく初出を手がかりにすれば、先の「神の如き明智」の発音はアケチではありえないことになる。

従来、清張や乱歩の全集刊行や研究は営利追求型の出版社や詰めの甘い評論家主導で行われてきたために、どうしてもこのような煩わしいことがおこりがちだ。初出文の軽視であり、本文異同や校訂などへの無理解・無頓着だ。本来なら、全集にも、初出文が収録されたり、校異表が付されたりしなくてはならないのだが、その辺も営利本位なので、このようなことになる。今回の例で言えば、かりに初出の「名智」を「明智」と正したのだとしても、注記が校異表がないために、メイチかアケチかわからなくなってしまう。

実は以上の一部は、「清張と本格派—乱歩封じ込め戦略のてんまつ—」（『国語と国文学』平成18・9）という論文の中にも書いたのだが、今回ここまで書いてきて、その論文に少し言葉を補わなくてはいいけないことに気がついた。

その論の中では、清張が読者に「何という神の如き明智（メイチ）であろう」という表現からアケチを連想させ、間接的な形で乱歩批判をした、と説いたのだが、それは「神の如き明智」には当てはまって、初出の「神の如き名智」には当てはまらない。つまり、初出の「名智」の場合は、アケチへの連想→乱歩批判→乱歩封じ込め（詳しくは拙論参照）は言えそうもないことになってしまうのである。

さて、ここからが悪あがきなのだが、たとしても、「名探偵の出し方も、あまりに現実離れがしている」とか「本職の警官や衆愚を尻目に、ひとりで超人的な活躍をする」、「最後に名探偵が超人的な推理を働かして、難事件を解決する」といったような表現から、読者にアケチを連想させることは十分可能なのではないだろうか。——もしこれが言えるのであれば、乱歩批判→乱歩封じ込めという拙論の論旨は、初出に関しても成立することになるのだが。

（本学文学部教授 センター長）